

目次



第一章 SAUDADE

- 伝説の大波はやってくるか? 12
- 石ころだって役に立つ 20
- 一九七三年のためのレクイエム 27
- 赤ヘルとカスバの女 36
- 映画で単位がとれた頃 43
- 「ついで」のように生きていた日々 52

第二章 RICHMAN POORMAN

- 富める者・貧しき者 62
- みんな貧しかった頃 71
- 環境にスポイルされない人々 78
- 子供たちの自尊心 87



第三章 MEMORIES OF YOU

- サヨナラだけが人生か 98
- 犬よりましな人生 105
- 赤い鳥を飛ばせ! 112
- 暴力と破壊の虚しさ 119
- 忘れがたい輝きを放つ時 125
- 汚れつちまつた悲しみ 132
- 人はどこまで無私になれるか 139

第四章 NOSTALGIA

- かつて満州という国があった 148
- 故郷に帰った日 155
- 早く昔になればいい 162
- おもいでのある夏——SUMMER OF '67 169
- 感傷の映画館 (Sentimental Movie Theater) 177



第五章

AS TIME GOES BY

- 言葉では伝わらないもの…………… 186
死に至る病…………… 193
破滅への甘い誘惑…………… 202
甘えがキミをダメにする…………… 208
せこくしぶとい男たち…………… 215
男たちの絆…………… 223

第六章

IT'S A WONDERFUL LIFE

- 人生は素晴らしいか？…………… 232
人生の勝ち負け？…………… 239
アル中はスペシャリストであらねばならぬ…………… 247
人生を構成する三つの要素…………… 255
誰かのために生きる…………… 263
切り抜ける…………… 270

第七章

IMPOSSIBLE DREAM

- 長い時間が奪い去る「何か」…………… 278
青年たちが共有した夢…………… 286
持続する志…………… 293
充たされない心を抱いて…………… 301
思い残す想い…………… 308
悔恨と失意の底で…………… 315
一六〇〇回の夜——あとかぎに代えて——…………… 321



SAUDADE

伝説の大波はやってくるか？

サーフィンで結ばれた三人の仲間たち

一九七九年、五月一日のことだった。

二十三年前になる。オンリー・イェスタデイ……ほんの少し前のこと。そう思っていることが、いつの間にか遙か昔の出来事になっているのに気付く。それが、歳をとるということなのだろうか。

その日、僕は代々木公園から新橋までのメーデー・デモに参加した後、新宿三丁目にあるロードショー館「新宿京王」の三回目の上映に入り、たったひとりで「ビッグ・ウエンズデー」を見た。満席ではなかったが、若い人が多く入っていた。僕も当時は二十七歳で、まだ若い部類に入る人間だった。

「ビッグ・ウエンズデー」は、青春の追憶から始まる物語だ。浜へいけばいつでも仲間たちがいて、乱痴気騒ぎができた夢のような日々から物語は始まる。一九六二年の夏。ビーチボーイズがデビュー曲「サーフィン」をヒットさせた年である。日本では橋幸夫が「スイム・スイム・スイム」と歌っていた。まだ、日本では「波乗り」という言葉さえ一般的ではなかった。

マットとジャックとリロイの三人はサーフィンで結ばれた仲間だ。マットはすでに浜の有名人。ペロペロに酔っていても、サーフボードを抱えて海に出れば、名人の技を見せて浜の

仲間たちから尊敬されている。サーフィン仲間の間ではどんな人間であっても、サーフィンが上手ければ王様になれる。

彼らは昼間はサーフィン、そして夜になるとパーティーでどんちゃん騒ぎに明け暮れる。毎日が楽しく、自由と豊かさを享受している。時には仲間たちとメキシコまで足を伸ばして大騒ぎする。彼らに怖いものはない。人生の悩みもないのだ。青春の一時期、そんな夢のような日々が訪れることがある。

イタリアの作家パヴェーゼも「美しい夏」の冒頭に書いている。

——その頃はしじゅうたのしいお祭り騒ぎがつづいた。家を出て、通りを横切ればたちまち熱狂できたし、あらゆるものがほんとにすばらしかった。

だが、そんな日々は永遠には続かない。いや、長い人生から見れば、ほんの一瞬だけ許された時間だ。彼らにも彼らの現実が迫り、自分の人生を生きていかなければならなくなる。桟橋は撤去され、浜には監視所ができることになる。彼らの兄貴分のような存在だったサーフボード作りの名人ベアも町に移り住む。時は過ぎ……、何かが変わってゆくのである。

一九六五年の秋が訪れる。相変わらず酒浸りのマットは泥酔して浜で寝ているところを、監視員になっているジャックに起こされる。マットはガールフレンドに子供が生まれたのにもかかわらず、うまく大人になれないままだ。真面目な性格のジャックは、きちんと人生を

引き受けて大人になっている。

そのことは、徴兵検査のエピソードで明らかにする。一九六五年に軍隊に入るということは、明確に死が予想できた。アメリカはベトナムの紛争に積極的に関与し、戦線は拡大する一方だった。

マットを始め、リロイも仲間たちも徴兵を免れるために一時的に不具者を装ったり、同性愛者を装ったりする。狂気を装ったリロイは本当に精神病院に収容されそうになり、仲間のひとりであるワクサーはホモ・セクシャルを装ったのが裏目に出て徴兵されてしまう。

だが、ジャックだけは志願する。彼は、もう二度と帰ってはこれないかもしれないという思いを抱いて最後の波に乗る。夕陽を浴びて、たったひとりでサーフィンをするシーンのジャックはとても素晴らしい。

青春に区切りをつけるために大波に挑む

三年が過ぎた一九六八年の冬、ワクサーはベトナムで戦死し、帰還してきたジャックは恋人のサリーが結婚していることを知る。数々の勲章を得たジャックだが、恋人は失ってしまった。マットとジャックとリロイは、戦死したワクサーの墓の前で友を偲んで飲み明かし、再び別れ別れになる。

人生とは、そういうものだ。いつまでもサーフィンだけをして生きてゆくわけにはいかない。サーフィンで結ばれた仲間たちは、過ぎゆく時と共に離ればなれになっていく。

しかし、黒澤明を神と仰ぐマツチョ監督ジョン・ミアスの映画である。そんな風に終わってしまうわけではない。ワクサーの墓の前で別れてから六年が過ぎた一九七四年の春、それ

はやってきた。

ビッグ・ウェンズデー。水曜日にやってくるという七メートルを超える伝説の大波。その大波に挑戦するためにマットが浜への石段をベア特製の大波用のサーフボードを抱えて降りていくと、石段の両脇でサーフボードを抱えて待っているジャックとリロイがいる。

まるで殴り込みに行く高倉健を待ち「お供させていただきやす」と言う池部良である。しかし、ミアスがここでオマーージュを捧げているのは、サム・ペキンパーの「ワイルドバンチ」に対してだ。彼らはライフルや拳銃の代わりにサーフボードを抱えて、三人並んで浜を歩いていく。

彼らは彼らの青春に区切りをつけるために、いや、自分の青春にケリをつけるために、壁のように迫ってくる大波に挑むのだ。その結果、マットはようやくサーフィンと（つまり青春と）訣別する。

サーフィンだけがすべてだった時代から、長く続く大人の人生を引き受ける覚悟ができたのである。自分の子供を産んだガールフレンドと結婚し、他の多くの人と同じように生きていくことを彼は選択する。

それは「やむを得ずサーフィンから離れる」こととは大きな違いがある。おそらく「伝説の水曜の大波」を制覇した彼らは、それを自らの人生のモニュメントとして、その後の長い人生を生き切っていけるだろう。

サーフィンは青春時代の宝物か

映画を見終わった時、僕は深い満足感に満たされていた。そして、ウィリアム・カットが演じたジャックの生き方が僕に深い印象を残した。おそらく、それはジャックのように生きたいと願いながら、マットのようにしか生きられない自分に気付いていたからだ。

優等生で勇敢で真面目で自らの人生をきちんと引き受け、志願して軍隊へ入りベトナムで恐怖を味わい、それでも多くの勲章を得て帰還し、愛する恋人の結婚を知り、人生とはそうしたものだと思え入れ、町で仕事を見付け……、だが、伝説の大波がやってきた時には浜に戻ってくる。

彼は、自分の青春時代の宝物をなくしてはいない。マットのように青春時代の宝物にしがみつくように、サーフィンから離れられないわけではない。サーフィンだけで生きていける時代にはそう生きているし、徴兵という現実によつてかれば覚悟を決めて志願する。

「ビッグ・ウェンズデー」を見た時、僕は二十七歳という中途半端な歳だった。会社に入つて四年が過ぎていた。もう新人ではない。結婚して三年が過ぎ、カミサンは秋のアパートの契約更新を控えてマンション購入を計画し、一週間前にその契約を終えたばかりだった。

カミサンがマンション購入に積極的になったのは、前年の秋に友人夫妻が購入したマンションを見に行ったからだ。その友人夫妻は、ふたりとも大手出版社に勤めていた。

僕ひとりの収入で生計を立てている我が家とは資金力が比べものにならなかったが、カミサンはひどく羨んだ。確かに六畳ひと間に三畳ほどのキッチンとトイレしかないアパートとは、天と地ほどの差があった。当時、僕は夜遅く仕事から帰り、毎日、閉まりかけた銭湯に駆け込んでいた。

しかし、僕はローンを組むことを自分の青春の終焉のように感じた。だから、積極的にモデルルームを見て回るカミサンには一度も付き合わなかった。挙げ句の果て、マンションの抽選会には付き合ったが、僕はどんな場所に建つのか、どんな部屋なのか全く知らずに契約をした。

そんな僕のなげやりな態度にカミサンが傷つくかもしれないことまでは、気が回らなかった。僕は、まだ若くて未熟だったのだ。

僕は将来に対して不安しか抱けなかったし、三十五年間も払い続けるローンというものにもまったく実感が湧かなかった。契約をした後にカミサンに連れられていった建設予定地は新駅が一年後にできるとはいつても、その駅からでも歩けば二十分はかかったし、モデルルームは妙によそよそしかった。

僕は、自分が何かに閉じ込められた気がしていた。後はただ、毎日、会社に勤め収入を得て、日々を過ごしていく。それだけの人生なのだと思う。実感は湧かなかったが、三十五年のローンは毎月の支払いはそのほどではなくても、気分的にはうんざりするほど重かった。

一九七九年五月一日の夕方、映画館を出た僕は、マット、ジャック、リロイがサーフボードを抱えて伝説の大波に向かうシーンを描いた看板をしばらく見上げていた。その時、突然「俺には一生、水曜日の大波なんてのはやってこないだろう」と、デスペレートな想いにとらわれた。

「水曜日の大波」と出会うために

……あの時の気分は、まだ覚えている。その後、何度か「ビッグ・ウエンズデー」を見る機会があり、その度に僕は二十七歳の時に感じた絶望感のようなものを甦らせた。そして、その後の日々の記憶を……

自分が何かに閉じ込められた思いは、あの頃、それまでの自分に似合わぬ振る舞いをさせた。僕は自分の人生に何かを求めてあらがった。それは、ジャックの生き方ではなく、覚悟が決まらず大人になりきれないマットのようだった。

今でも僕は鮮明に思い出す。新宿ゴールデン街の飲み屋で夜明かしをして始発電車を待つ間に見た新宿駅にかかっていた「ビッグ・ウエンズデー」の看板と、その時に「俺たちには、水曜日の大波なんかくるわきゃないんだ」とつぶやいた己の老人のようにしゃがれた声を……

僕は中途半端に若く、中途半端に世間ずれしていて、自分自身を憐れむことしかできず、自虐的な言葉の裏に強い自尊心を持ちながら、大切な人たちを傷つけることに鈍感で、前途に待ち受ける長く不安に充ちた人生に立ち向かう自信はまるでなかった。

しかし、初めて「ビッグ・ウエンズデー」を見てから二十三年の時間が過ぎた。驚いたことに、僕はその二十三年間を（八四〇〇回の夜を）生きてきたのだ。振り返れば、とても不思議な気がする。

僕の記憶の中では、それはほんの昨日のこのようだ。それに、今でも自分がきちんと自分の人生を引き受けている実感はない。相変わらず、何かを求めてあらがっているような気もする。

時たま「やっぱり、水曜日の大波はこなかったな」と、深夜にバーボンの酔いの深まりと共に不意の感傷に襲われることがある。残念ながら、僕は未だに人生のモニUMENTになるような「水曜日の大波」とは出会っていない。

だが、現実の人生を振り返る時、もしかしたらあれが僕のビッグ・ウエンズデーだったのかも思えないと思うことはいくつかある。多くの人の人生と同じように……

石ころだって役に立つ

この世に無用のものなど存在しない？

関川夏央さんの新刊が出た。「石ころだって役に立つ」（集英社刊）というタイトルだ。いつものように「うまいなあ」と思う。「石ころだって役に立つ」というタイトルは、フェデリコ・フェリーニ監督の「道」（二九五四）の中のセリフからとっているのだが、それに着目するセンスがいかに関川さんらしい。

初めて「道」を見た時に僕はひどく感動し、見終わって涙をぬぐった記憶がある。まだ十代半ばだった。その時の僕が「道」が描き出す人生の核（あるいは悲哀）のようなものを理解したとは思えないが、ラストシーンのアンソニー・クインの号泣につられるように僕は泣いた。

自分が棄てたジェルソミーナ（ジュリエッタ・マシーナ）の死を知った大道芸人ザンパノ（アンソニー・クイン）は、浜辺で身を悶えさせて泣く。それまで、粗暴で粗野なだけの男でしかなかったザンパノの号泣は唐突な気がしたが、おそらく多くの観客の涙を誘ったはずだ。

「道」が語られる時、有名なテーマ曲と共にそのラストシーンは必ず話題になる。しかし、「道」には、もうひとつの印象的なシーンがある。

刃物沙汰を起こして警察につかまったザンパノを待つジェルソミーナに、一足先に釈放さ

石ころだって役に立つ

れた喧嘩相手の綱渡り芸人（リチャード・ベイスハート）が「俺と一緒にいかないか」と誘うシーンである。「石ころって何かの役に立っている」というセリフはこのシーンで語られ、観客の胸に深く刻み込まれる。

綱渡り芸人は、ジェルソミーナの顎に手を当て「これでも女の顔か」とひどいことを言う。その後、「料理できるか」とか「歌や踊りはできるのか」「男は好きか」などとジェルソミーナを問い詰め、彼女が何の役にも立っていないと思わせる。ところが、ジェルソミーナが沈み込んでしまうと、急にそれまでのからかうような態度を改めるのだ。彼は言う。

——前に本で読んだが、どんなものでも何かの役に立っている。

たとえば、この石ころだ。

——どの石？

——どれもいい。何かの役に立っているんだ。

——何の？

——それは……、僕に聞いてもダメだ。神様が知っている。

人がいつ生まれ、いつ死ぬか……。

この石もきつと何かの役に立っている。無用のものなどない。

君だって、君だってそうだ。

ジェルソミーナは石ころを目の前にかざし、しみじみとうなずく。先ほどの沈んだ表情が消え、目が輝き出す。動きが滲刺としてくる。精神の高揚が彼女の全身から見て取れる。彼女は、自分の存在理由、存在価値を自覚する。自分がこの世に生きている意味を知り、初めて生きていく喜びを感じるのである。頭が弱く、不美人で、何の取り柄もない自分でも何かの役に立っているのだと、彼女は実感する。

愛されることで存在する意味を感じる

「道」は、後に世界的巨匠になるフェリーニが国際的に評価されるきっかけになった映画である。一九五四年、フェリーニ三十四歳の時の作品だ。イタリアが解放されてからまだ十年しか経っていない。日本も貧しかった頃だが、イタリアの当時の貧しさも映画からひしひしと伝わってくる。

海辺の村で暮らしていたジェルソミーナは、先に売られて大道芸人のザンパノの助手をやっていた姉が死んだため一万リラで売られる。多くの妹がいるジェルソミーナの一家は、ひとりでも口が減れば助かるのだ。

しかし、ザンパノは粗野で乱暴で、繊細さのカケラもない男である。小悪党で女にだらしない。ジェルソミーナを道端に残して、他の女とどこかへしげ込むような男だ。

ザンパノは「鉄の肺を持つ男」という呼び込みで、胸を縛った鉄の鎖を大きく息を吸い込み筋肉で引きちぎる芸だけで生きている。オートバイに小型の幌を張った車を牽引し荷物とジェルソミーナを乗せ、野宿をしながら町や村を巡業している。

ジェルソミーナは太鼓やトランペットを練習させられ、道化の姿でザンパノの芸を盛り上

げる。その道化のメイクをした大きな目をクリクリと動かすジェルソミーナの表情が悲しい。彼女は粗暴なザンパノに傷つけられているのだ。頭が弱い女、客寄せの手伝いをさせる女としてしか扱わないザンパノ。彼女は肉体以上に精神を傷つけられている。

ザンパノは昔なじみのサーカス団と出会い、その一座に加わることにする。ジェルソミーナに人間らしく接してくれる人たちがようやく現れたのだが、いがみ合う綱渡り芸人とザンパノは喧嘩をして警察に逮捕される。

サーカスの人たちと一緒にいけばジェルソミーナはザンパノと別れられるのに、なぜか彼女はザンパノを待つ。彼女はザンパノが自分を必要としているのか、それも女として必要としているか、確かめたかったのではないだろうか。綱渡り芸人は言う。

— 奴はおまえに惚れているんだらう。あいつは犬だ。

おまえに話しかけたいのに、吠えることしか知らない。

頭は少し弱いけれど聖女のような存在、というキャラクターは多く描かれてきたが、ジェルソミーナは典型的な「聖なる愚者」である。傷つきやすい心と無垢な魂を持っている。ジェルソミーナは、犬のように吠えることしか知らないザンパノを「かわいそう」とつぶやく。彼らは再びふたりだけで巡業を始めるが、修道院の納屋に泊めてもらった夜、ジェルソミーナはザンパノに「私が死ねば悲しい？」と聞く。その後、彼女はこう続ける。

——前は、あんたというなら死にたいと思った。今は結婚してもいい。いつも一緒だし、石でも役に立つのなら。

——ザンパノ、私のこと好き？ とジェルソミーナは問いかける。

愛されていること、それが人が生きていく理由になる。誰からも愛されていない、必要とされていない、死んでも悲しんでくれる人がいないと思った時、人は真の意味での絶望を味わうに違いない。

石ころほども役に立たない人間になった男の絶望

十代半ばという年頃は、今から振り返れば難しい時代だった。

自分が何者なのか、どんな人生を送るのか、将来はどうなるのか、今、自分がいる場所は本当に自分がいるべきところなのか、誰か自分を愛してくれる人はいらるのだろうか、自分は誰かにとって必要な存在なのだろうか。

言葉にすれば、そんな不安と怖れがいつも気持ちのどこかに混沌と存在し、いつどこにいてもその想いに迫られている。

そんな想いとは別に、社会に対しての幼い正義感が働き始める。新聞ではベトナム戦争の報道が増え始めていた時期だ。アメリカが北爆を開始し、まだアメリカの植民地だった沖縄から軍用機が飛び立った。アメリカ軍兵士によるベトナム処刑の写真が公開され、逃げまどう難民たちの写真が週刊誌に掲載された。

そうした写真が少年に衝撃を与えないはずはない。社会に対して異議申し立てをすべきだという想いは日々募った。しかし、何をしたいのか、どうやって成すべきなのか、皆目わからない。焦燥感に責められる日々だった。自分が何者でもなく無力な存在なのだと思いつかれた。

そんな頃だった。地方都市の映画サークルが一日だけ「道」を市民会館で上映した。その上映会のポスターを学校帰りに見かけた僕は、友人を誘った。しかし、彼は『道』なんて今更、甘ったるいだけの映画だろ」と言った。

確かに僕らの世代は「道」を甘美なテーマ曲でしか知らない。名作の誉れは高かったが、フェリーニ作品としてはその後に関された「甘い生活」(一九六〇)や「8½」(一九六三)の方が先進的な評論家や文学者たちには評価されていた。それらの評論家たちの言葉をいくつか引用した後、彼は断言した。

——フェリーニは「甘い生活」が一番だ。

うざ、「8½」かな。あんなに前衛的な映画はないよ。

結局、僕はひとりで「道」を見にいった。そして、ジェルソミーナに「石だって何かの役に立っている」と語り、彼女の瞳に希望の炎を燃え上がらせた綱渡りの青年の言葉に、僕も慰められ励まされた。

石ころだって役に立つ

——石だって何かの役に立っているのなら、僕を必要とする人がどこかにいる。
——石ころだって役に立つなら、僕を必要とする世界がどこかにある。

市民会館からの帰り道を自転車で疾駆しながら、夜空に向かって僕はそんな言葉を叫んでいたかもしれない。市街から外れたたんぼ道で見上げた星空が特別きれいに見えたことを覚えてる。

あれから長い時間が過ぎてゆき、一九九三年にフェリーニは死んだ。翌年、彼を追うように半世紀を夫婦として、監督と女優として、共に生きたジュリエッタ・マシーナも死んだ。だが、彼女は無垢な魂を持つジェルソミーナとしてスクリーン上に永遠の姿を遺した。

初めて「道」を見た時、僕の涙は哀れなジェルソミーナのために流れた。そして、ラストシーンのザンパノの涙も僕は贖罪の涙だと理解した。あるいは懺悔の涙だと……

だが、今の僕にはわかる。あれは、自分を愛して（必要として）くれた人間、そして自らも愛して（必要として）いた人間を失い、自分が石ころほども役に立たない人間になった男の心の底からの悲しみと絶望の涙だったのだ、と……

一九七三年のためのレクイエム

泣かないのか——一九七三年のために

「泣かないのか泣かないのか、一九七三年のために」という芝居がある。清水邦夫が戯曲を書き、石橋蓮司と蟹江敬三が主演した。演出は商業演劇に進出する前の蜷川幸雄である。銭湯で会ってしまった元全共闘の男と機動隊員の話だ。

もうひとつ、一九七三年をタイトルにした小説がある。村上春樹の二作目の中編「一九七三年のピンボール」だ。これは大江健三郎の「万延元年のフットボール」を意識したタイトルなのだろうか、と本が出た当時、僕は思った。

万延元年は桜田門外で大老の井伊直弼が水戸藩士たちのテロにあい、首をとられた年である。もっとも、大江の小説は、そんなこととは関係はない。過激なパロディスト筒井康隆が「万延元年のラグビー」という井伊直弼の首をラグビーのボールに見立てたグロテスクな小説を書いているだけだ。

しかし、清水邦夫と村上春樹は、なぜ一九七三年にこだわるのか。清水邦夫の芝居は七十年代後半に初演され、村上春樹の小説は一九八〇年六月に発行された。